
東北芸術工科大学 紀要

BULLETIN OF TOHOKU UNIVERSITY OF ART AND DESIGN

第29号 2022年3月

天童アートロードプロジェクト

— 団体の概要と2012年から2020年の実践報告 —

”Tendo Art Road Project”

— Group Overview and Practice Report from 2012 to 2020 —

石沢 恵理 | ISHIZAWA Eri

天童アートロードプロジェクト

— 団体の概要と2012年から2020年の実践報告 —

”Tendo Art Road Project”

— Group Overview and Practice Report from 2012 to 2020 —

石沢 恵理 | ISHIZAWA Eri

The purpose of this paper is to summarize and consider the characteristic activities of the art project ”Tendo Art Road Project” from 2012 to 2021.

There are two characteristic activities of ”Art Road”. One is to hold an art workshop to rediscover the attractive of the area. The second is an exhibition held in collaboration with the citizens. ”Art Road” gradually changes the content of activities by creating activities with citizens who have diverse ideas.

It is considered that the activities of ”Art Road” have proposed opportunities for citizens to feel close to art and to meet various values.

Keywords:

アートプロジェクト、ワークショップ

Art Project , Workshop

1. はじめに

(1) 本稿の目的

現在、日本各地で数多くのアートプロジェクトが開催されており、国際的で大規模な芸術祭から小規模な取り組みまで、その目的や活動形態は多種多様だ。

本稿は、筆者もメンバーとして活動を行なっているアートプロジェクト「天童アートロードプロジェクト」(以下、「アートロード」)について、2012年から2020年までの特徴的な活動をまとめ、考察することを目的としている。

(2) 日本のアートプロジェクトの位置付けについて

そもそも、アートプロジェクトは日本でどのように位置付けられてきたのか。熊倉は「現代美術を中心に、おもに1990年代以降日本各地で展開されている共創的芸術活動。」として、「作品展示にとどまらず、同時代の社会の中に入りこんで、個別の社会的事象と関わりながら展開される。」「既存の回路とは異なる接続／接触のきっかけとなることで、新たな芸術的／社会的文脈を創出する活動。」と記している。(熊倉2014, 9ページ)中でも、2000年代以降、「大地の芸術祭」越後妻有アートトリエンナーレに代表される、特定の地域を舞台として開催されるアートプロジェクトやアートフェスティバルの隆盛によって、これまであまりアートに関心のなかった人も作品を見るために地域を巡り、様々なテーマで開催されるワークショップに参加するなど、芸術に触れる機会が多様化している。

このように、数多くのアートプロジェクトが開催されたことによって、さまざまな論点から議論も行われている。山本は、加治屋、熊倉の主張に注目し、日本のアートプロジェクトは

欧米のアートプロジェクトと比較した際に、その起源の違いから「政治的メッセージや社会批評的視点を明確にした表現が少ない」ことを挙げている。(山本2019,196ページ)また、藤田は、地域と結びつきながら展開するアートプロジェクトを「地域アート」とし(定義としては、熊倉のアートプロジェクトと同様の意味を持つ)、「芸術は『地域活性化』や『経済効果』の道具として扱われ」、「芸術性」の意味合いが書き換えられてしまうのではないかと指摘する(藤田2016,22ページ)。

このように1990年代以降のアートプロジェクトの隆盛によって、アートプロジェクトの分析や議論が多様化してきたことがわかる。

2.天童アートロードプロジェクトについて

(1)団体の目的と運営について

アートロードは、2012年から山形県天童市を拠点に、「アートと地域の新しい関係性をつくりだす」ことを目的として、東北芸術工科大学の卒業生やコンセプトに賛同した市民が「天童アートロードプロジェクト実行委員会」(通称メンバー)として活動を行なっている。上記の目的を達成するために、地域の魅力を再発見するアートワークショップ「ちよとちがういつもを歩こう—マチナカ発見ワークショップ—」(以下、「ちよとちがういつもを歩こう」)の開催、年に1度、天童市の中心部にある天童市美術館で展覧会を開催するなど、さまざまな活動を行っている。多くの市民にアートを身近に感じてもらうこと、また、アートを通して多様な考え方に会える場を創出することを目指して、日々、試行錯誤している。

運営方法として、まず、「コアメンバー」が3週に1度のペースでミーティングを行い、企画内容やスケジュールについてのたたき台を作成する。「コアメンバー」には、東北芸術工科大学の卒業生などの美術を専門的に学んできたメンバーが多い。その後、年齢も職業もさまざまな市民、アートロードメンバーとの話し合いを経て活動内容が決定する。

(2)アートロードのワークショップの考え方について

実際に、メンバーが活動を企画する際には「人々のコミュニケーションを創出するために、アートをどのように活用できるのか」という実験的な考えがある。そのことを最も現して

いるのが、ワークショップの活動だ。

後ほど詳しく述べるが、美術館を飛び出し、さまざまな場所で、地域の特性を取り込みながら企画するワークショップ「ちよとちがういつもを歩こう」や、介護老人福祉施設、学童保育所などで、対象者の日常に入り込み、遊びを届ける「出張ワークショップ」などがある。

「ワークショップ」のとらえ方も立場によってさまざまだが、中野の「講義などの一方向的な知識伝達のスタイルではなく、参加者が自ら参加・体験して共同で何かを学びあったり創り出したりする学びと創造のスタイル」(中野2001, 11ページ)が、ワークショップを表すものとしてわかりやすい。本稿で提示するワークショップは、「ものづくり活動や美術技法を活用したアートワークショップ」のことを指す。

中野は、さまざまなワークショップの活動を7つの領域に分けて分類を試みているが、アートロードのワークショップは、「アート系」、「まちづくり系」、「教育・学習系」と、中野の設定する領域を横断し、分類に収まりきれないものとなる。苺宿は、2000年代以降ワークショップが「中野が試みた分類を超えた活発な展開を見せ」ており、「周辺分野に越境しあい、新しい分野を作っている。」(苺宿2012, 4ページ)としてワークショップを再定義する。アートロードのワークショップも苺宿の指摘とリンクしている。

アートロードでは、ワークショップを企画する際に、①参加者が主体的に活動に参加する、②講師も参加者もお互いに刺激し合う、③活動のプロセスを大切にす、④その場で生まれるゴールの形を大切にす、この4点を重視してきた。

これらの考えには、「講師／受講者」、「教える／教わる」といった固定化された関係性から脱却し、お互いが学び合う場を作り出そうとする教育・学習からの問題意識と、「アーティスト／鑑賞者」、「作品を提示する／作品を見る」という関係性からの脱却というアートからの問題意識が含まれている。関係性の再構築を図ろうとする点において、教育とアートの2つの領域が重なり合っている。

また、実施されるワークショップの中には、「地域の新しい風景を探し出す」というテーマが設けられているものがある。アートロードの拠点である天童市の市民が対象者になるため、いかにして地域をとらえる新しい視点を提案するかが課題となる。このようにアートロードのワークショップには、「アート」、「教育」さらには「地域」といった領域を横断する問いかけが存在しているため、企画の際の「難しさ」として

メンバーの前に立ちばかる。この「難しさ」に対して、メンバーそれぞれがどのように向き合ってきたのかは、今後、丁寧に考察していく必要がある。

これまで、「ワークショップ」の定義と、アートロードのワークショップに対する考え方について述べてきた。次章からは、年代ごとの具体的な活動内容についてまとめ、現在のアートロードがどのように形作られてきたのかを記述していく。

3.活動内容とその特徴について

(1)活動の模索(2012年～2014年)

①ワークショップ「ちょっと違ういつもを歩こう」と展覧会の機能について

活動の初年度である2012年から、「アートと地域の新しい関係性をつくりだす」ために、ワークショップ「ちょっとちがういつもを歩こう」の開催と、天童市美術館での展覧会をスタートさせた。

「ちょっとちがういつもを歩こう」は、「地域の新しい風景を探し出す」ことを共通のテーマにし、複数のメンバーがそれぞれの専門性を生かした独自のワークショップを開催するものだ。2012年は、美術館周辺を散策し、見つけたものを「なぞなぞ」として書き出す『天童なぞなぞ街あるき』(田中里美)や、ポイントとなる風景を決め、その風景の上にアクリル板に描いた絵を重ねて覗き見る『へんてこ望遠鏡』(芳賀一彰)など、美術技法やメンバーの専門性を生かした内容となった。



写真1:「天童なぞなぞ街あるき」で美術館周辺を散策



写真2: 散策して見つけたことをクイズにして紹介する

また、ワークショップで制作した作品とメンバーの作品を発表する機会として、天童市美術館で展覧会『はじめの一步展』を開催した。展示には、絵画、立体作品のほかに、ワークショップを作品として出展するメンバーもいた。一般的に、美術館では、他の来場者の鑑賞の妨げにないように静かに鑑賞することが前提になっているが、アートロードの展覧会では、作品の鑑賞や体験を通して、おしゃべりや笑い声生まれ、賑やかな展示空間がつけられていった。

このように、ワークショップは身近な地域を改めて見つめ直す機会となり、展覧会は来場者にアートロードそのものを紹介し、地域の方とのつながりを生み出す機会となっていった。この2つの活動が軸となって、アートロードは、市民を巻き込みながら、さまざまな活動を展開していく事になる。

②ワークショップを通した多様な地域との関わり

ワークショップや展覧会が地域とのつながりを生み出す場になったことで、内容に変化が生まれる。

2014年に行われたワークショップ『ショウシ粘土で遊ぼう!』(イシザワエリ)は、天童市が生産量日本一を誇る将棋駒をテーマにした内容だ。具体的には、将棋駒を製造する工場を見学し、廃材となる木屑を材料にして粘土をつくる。参加者は、生産者から将棋駒の製造について学んだのちに、廃材となる木屑を見せてもらうのだが、無用となった木屑がとても滑らかな質感をしていることに全員が驚いていた。このように、普段触れることがない素材との出会いや、粘土を作ることを通して素材のそのものの質感を楽しむ点がこの活動の特徴だ。



写真3: 将棋駒の工場で駒作りの一部を体験する



写真5: 郷土史家から地区の歴史や言い伝えを聞く



写真4: 廃材となる木屑を活用して粘土をつくる



写真6: 場所にまつわる話を聞くことで想像力がふくらむ

また、『高揃にすむ架空生物をつくらう』（芳賀一彰・村山正市）では、作家と郷土史家が協働して企画した内容だ。まず、天童市高揃地区の名所を散策し、参加者が気になった場所について、郷土史家の村山が歴史的な観点から解説を行う。その後、参加者は解説を聞いて気に入った場所を選び、そこに棲んでいそうな架空生物を粘土で制作する。参加者は、歴史的な話を聞くことで場所に対してのイメージを膨らませ、作品の形や色に対してこだわりを持って制作を行っていった。

初年度2012年の活動は、地域を外から「眺める」ような関わりだったが、2014年の活動では、「素材」や「人」を切り口に、地域との関わりを深めた内容となった。参加者は、ワークショップを通して、産業や歴史など多角的な視点から地域を見つめる事になる。また、協力者となった地域の人にとっても、改めて地域を見つめる機会となる。1つのワークショップをつくりあげることを通して、メンバー、協力者となった地域の方、そして参加者が相互に学び合う機会となった。

展覧会の方でも、初年度の『はじめての一步展』は、出展者4名、美術館の3分の1のスペースでの展示だったが、2014年の『てんてん展—えがく・ほる・つむぐ人たち—』では、出展者31名、美術館の1階フロアを全て使用するまでに拡大した。2014年の『てんてん展』で特徴的な点は、参加者が10代から70代と幅広い年齢層であること、また、作家として制作を続ける人や、独学で絵を描き続けている人など、さまざまな経歴のメンバーの作品が同列に展示され

たことが挙げられる。

また、会期中に行われるワークショップも、日時を指定し、イベント的に行う活動の他に、会期中であればいつでも体験できる活動も加わり、会場では常に何かが起こっている「ごちゃまぜ」の空間が出来上がっていった。

この「ごちゃまぜ」の雰囲気が、メンバーや来場者に「アートロードらしさ」として定着していく。



写真7:2012年『はじめての一步展』



写真8:2014年の展覧会では、作品で会場が埋め尽くされた



写真9:ワークショップで制作した作品も作家の作品も並列に展示

③「しゃべっペナウ」の開催—地域の方から学ぶ—

上記のように、幅広い年代、異なる立場のメンバーに参加してもらうきっかけになったのが「天童meetsしゃべっペナウ」(以下、しゃべっペ)だ。この活動では、アートロードの展覧会を訪れた人や、自分の好きなことや得意なことを生かし活動する人をゲストとして招き、活動内容やその原動力などについてお話を伺う。会は非公開で行われ、質疑応答を織り交ぜながらアットホームな雰囲気で行われた。これまで、地元の風景を取材し独学で風景画を描く商店経営者や、子育てとアートの関わりについて考える2人のお子さんを持つお母さん、介護老人福祉施設に勤務しながら発掘や研究を行う郷土史家の方など、年齢も立場もさまざまな11名の方にお話いただいた。



写真10:ゲストの話を伺う

美術大学で芸術を専門的に学んできたメンバーにとっては、さまざまな生き方や生活の中から生まれる力強い表現に触れることで、これまで学んできた芸術のあり方について問いを投げかけられる。また、ゲストにとっては、普段とは異なる場所で、自らを語ることによって、日常だと考えていたものを新たな角度から見つめる機会となった。このように、「しゃべっペ」を通して、ゲストにアートロードの考え方や活動を理解してもらい、展覧会に参加してもらうきっかけをつくってきた。

「しゃべっペ」は、2015年以降開催されていないが、団体の考え方や方向性を決定づける重要な活動としてとらえることができる。

(2)ワークショップの拡張とさまざまな対象者との関わり (2015年～2017年)

①「出張ワークショップ」の特徴

活動内容が安定してきた2015年以降、アートロードは地域との関わりを拡張させていく。「出張ワークショップ」と呼ばれるワークショップは、学童保育所や放課後等デイサービスなどの現場にメンバーが出向き、ワークショップを開催する一連のプロジェクトのことだ。これまで開催してきた「ちょっとちがういつもを歩こう」のワークショップは、定員制で美術館への事前申込が必要であったため、もともとアートに関心のある参加者が多かった。「出張ワークショップ」では、アートに関心がない、または苦手意識を持つ人たちにも、彼ら/彼女らの日常の中でアートに出会うきっかけとしてプログラムを実践してきた。



写真11: 高齢者を対象とした『切り紙つなぎプロジェクト』

コアメンバーの1人である樋口が考案した『切り紙つなぎプロジェクト』は、放課後等デイサービスに通う1人の子どもの姿がきっかけとなっている。もくもくと切り紙を制作する姿を見て「一人の遊びが多くの人々の遊びのきっかけとなって、大きなものができる様子を見てみたい」という考えからスタートした。この活動は、参加者に自由に切り紙を作ってもらい、それらをひたすらつなげていくシンプルなものだ。プロジェクトは、高齢者施設での文化祭の展示物制作として、また、学童保育所では宿題が終わった子どもの遊びの1つとして、現場ごとの目的に合わせて実施された。



写真12: つなげた切り紙を展示会で展示

各現場では、日々の業務が綿密に計画されているため、外部からの企画を取り入れることに対して慎重にならざるを得ない。そうした中、複数の現場でプロジェクトが実施できたのは、プロジェクト自体が遊びのような気軽さと、状況に合わせて制作の目的を柔軟に変化できる特徴があったからだと考える。メンバーだけではなく、それぞれの現場の人々がプロジェクトを活用したことも、これまでの活動と異なる点だ。



写真13: 『スケルメン』の様子



写真14: 500枚以上の『スケルメン』が集結

さらに、この特徴にコミュニケーションの要素を加えたものが2016年にスタートした『スケルメン』（樋口健介）だ。『スケルメン』は、対象者の顔の前に透明な板をかざして、相手の顔を描く似顔絵遊びだ。顔を描くことに対してハードルが高いと感じる人も多いが、このプロジェクトでは、描く線がズレて、不思議な顔になるところがポイントとなる。また、お互いを見つめ合い、落書きをするという非日常的な状況が参加者の笑いを誘発する。描くことがきっかけとなり参加者間の緊張感を解きほぐし、関係性をゆるやかなものにしていく。

『スケルメン』のプロジェクトも、さまざまな現場で異なる対象者に向けて実施された。後に、「イベントや研修のためスケルメンを行いたい。」と他のボランティア団体から依頼を受け、コンテンツそのものを他団体に実施してもらう機会も生まれた。このことは、『スケルメン』がアートロードのコンセプトを内包したプロジェクトとして、メンバーの手を離れ、社会に広がったことを示している。

2つの「出張ワークショップ」に共通してみられたことは、現場ごとの支援者と利用者の関わりにささやかな変化を生み出したことだ。例えば、学童保育の現場において、スタッフとそこに通う子どもたちは「指導員／利用者」として日常を過ごしている。そこに、第三者であるアートロードメンバーが入り込みワークショップを行うことで、スタッフも子どもも「指導員／利用者」の関係性を超えて、表現を楽しむ人として同じ立場に立つことになる。手を動かすことで生まれる表現には、一人ひとりのこだわりや趣向が自ずと反映されるため、普段は見えない参加者の側面を引き出し、お互いの理解を深める機会となった。

樋口は、こうしたプロジェクトから「人と人とを繋ぐ媒介としての美術の機能」を考察する。言語によるコミュニケーションではなく、ものを作る・表現することによるコミュニケーションは「造形活動への参加者が特に共通のコンテキスト（背景、状況、文脈）を持たない場合により有効に働く」と考え、「造形活動という遊び場を共有すること」で美術が人と人を繋ぐ媒介としての機能を持つ事を考察する。

「出張ワークショップ」によって、高齢者や放課後等サービスに通う子どもたち、未就学児など、これまで関わることがなかった対象者と出会い、彼ら/彼女らが作品を見るために美術館を訪れる循環が生まれるようになった。

ここで、アートロードで生まれた2つのワークショップの特徴を比較する。「ちよつとちがういつもを歩こう」では、メンバーの専門性や地域の特性を活かした学びあいの場づく

りを行ってきたといえる。それに対して「出張ワークショップ」では、アート機能の拡張させ、さまざまな人や出来事をつなぐ機会を生み出してきた。

「アートと地域の新しい関係性をつくりだす」というアートロードの目的を、メンバーが自分なりに解釈し、アプローチした結果、多様なワークショップが生み出され、アートロードと地域との関わり方を重層的なものにしてきたことがわかる。

②アートロードの持つ「曖昧さ」

さまざまな現場に向かうことがきっかけとなって、異なる文脈の人に向けてアートロードの取り組みを説明する機会が増えていった。2016年には、5年間の活動をまとめた冊子『天童アートロードプロジェクトによる道草のガイドブック』道草のすすめ』の製作を行ない、メンバーがこれまでの活動を振り返り、団体を語るための言葉を構築する機会となった。

これまで、写真15)のように、さまざまな年齢、立場の人を巻き込むワークショップと展覧会の仕組みについて述べてきた。

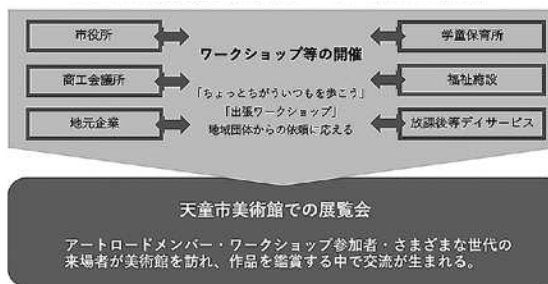


写真15:さまざまな対象者を巻き込むワークショップと展覧会

アートロードの活動では、メンバーが各々の立場から「関わり方」を模索したり、「おもしろさ」を見つけていくことが可能だ。このことは、アートロードの価値は「各自が勝手に見つけていくもの」として開かれていることを示している。

つまり、アートロードでは、異なる立場の人が自分の価値観を大切にしながら参加できるように、団体の目的や意義を、意識的に「曖昧」にしてきたと言える。こうすることによって、目的や活動の意義が固定化されることをゆるやかに回避し、多角的な視点を取り込みながら、活動を少しずつ変化させてきた。

アートロードの活動に初めて参加する人からは、「何をしているのかよくわからない」と言われることも多いが、同時に「楽しい!」「いきいきしている」とも言われる。活動の意義を

常に問い直し、新しく作り出そうとするエネルギーそのものがアートロードの特徴となっている。

(3) 展覧会の拡張とコロナ禍での活動(2018年～2020年)

①「遊び場」としての展覧会

多くの人々を巻き込むことで生まれるエネルギーを最大限に引き出すために、2018年の展覧会『てんてん展のおかしな箱』から、展示室を1つの「箱」ととらえ、パーティションを設けない広い空間に作品を展示した。また、天童市美術館の展示室がカーペットであったことから、来場者には靴を脱いで入ってもらうようにしたことで、来場者が自分の好きな場所を見つけ、以前よりもじっくりワークショップを体験するようになった。



写真16: 参加者は好きな場所、好きな時間にもものづくりを楽しむ

この会場構成は、2019年の『てんてん展のぱびぷべぱぷ』にも引き継がれた。会場を何度も訪れてワークショップを体験する小学生や、イベント日を避けて平日にゆっくり過ごす未就学児を連れた親子など、来場者が自分なりの展覧会での過ごし方を発見し、利用する様子が見られるようになった。

このように、来場者に展覧会の過ごし方を委ねることで生まれる公園のような展示空間は、アートロードの1つの展示スタイルとなった。



写真17: 未就学児をつれた親子がゆったり過ごす



写真18: 会場と作品が連動して遊びの空間ができる

さらに、2018年から、美術館と美術館をつなぐ取り組みとして、同じく天童市にある広重美術館で、展覧会中に1日だけのマルシェ『SHOP Ten Ten Ten』を開催した。広重美術館では、メンバーの作品を購入できるため、販売という手法で訪れた方との交流を楽しむ機会になった。



写真19: 広重美術館での『SHOP Ten Ten Ten』の様子

②コロナ禍での活動

このように、アートを通して人と人との出会う場を作り出してきたアートロードだが、2020年に世界的な感染拡大を引き起こした新型コロナウイルス(COVID-19)の影響によって、活動の制限が余儀なくされた。人々の暮らしの中でも、感染を防ぐために人と人の距離を取る、大声での会話を控えるなど、交流を図るための行為が禁止事項としてとらえられるようになった。

こうした状況下においても、アートロードができることを提案する機会として、天童市美術館1階のロビー空間を使用して、2日間のワークショップとプチ展覧会『てんでん展のアートワークショップ ちょとちがういつもを遊ぼう!』を開催した。感染症対策のために設けられたさまざまなルール(手を洗うこと、人と人の距離を取るなど)を「あそびのルール」としてとらえ直すことをテーマに掲げ、2日間で合計6種類のワークショップを開催した。

これまで展覧会でのワークショップは、人数制限を設けていなかったが、2020年は1回のプログラムを1時間半とし、事前申込制にすることで感染症対策を考慮して開催した。具体的なワークショップとして、美術館に入る際の手洗いを楽しんでほしいという考えから生まれた『キレイキレイでモンスター』(むらやまはるかきだしのぶ)や、人と人の距離をとりながら自分の体を軸にしてダイナミックな表現を楽しむ『まほうじんソーシャルディスタンス!』(イシザワエリ)など、人数は限定されたものの、メンバーと来場者がじっくり会話を楽しみながらものづくりを行う機会をつくることにつながった。

2020年の実践は、コロナ禍が続く2021年にも引き継がれ、新しい展示のあり方を模索していくための基盤となっていく。



写真20:手に絵具をつけてスタンプ遊びをしてから手洗いを楽しむ



写真21:自分の体を軸にして「まほうじん」を描く

4.おわりに

これまで、ワークショップと展覧会の活動を中心として、2012年から2020年のアートロードの活動について記載してきた。これまでみてきたように、アートロードは、地域のさまざまな場所で、幅広い年代や異なる立場の人と出会い、その人々からの刺激を受け、活動内容を変容させてきた。活動を通して、アートが「外からやってきた権威あるもの」ではなく、一人ひとりの日常から立ち上がってくることで、その多様さを地域社会に提示してきたとえる。

しかし、上記のような特徴を持つアートプロジェクトは、現代アートの文脈の中で数多く論じられている。今後の課題として、アートロードの具体的な活動を取り上げ、より詳細に事例を分析していくこと、また、アートや教育など領域を横断した視点を持ちながら、どのような論点から考察するのかを明確にしていく必要があると考える。

謝辞

天童アートロードプロジェクトの活動を通して、さまざまな方の生き方に出会い、遊びながら学ぶという幸せな機会をいただきました。共に活動をつくりあげてきたメンバーの皆様、いつも温かく見守ってくださる天童市美術館の池田館長、スタッフの皆様、そして、地域の皆様に、この場を借りて感謝申し上げます。

参考・引用文献

熊倉純子〔監修〕菊地拓児+長津結一郎〔編〕(2014)『アートプロジェクト 芸術と共創する社会』水曜社。(P9)

藤田直哉〔編・著〕(2016)『地域アート 美学/制度/日本』堀之内出版。(P22)

山本浩貴(2019)『現代美術史 欧米、日本、トランスナショナル』中公新書。(P196)

中野民生(2001)『ワークショップー新しい学びと創造の場ー』岩波新書。(P11)

荏宿俊文、佐伯胖、高木光太郎〔編〕(2012)『ワークショップと学び 1 まなびを学ぶ』東京大学出版社。(P16,17)

天童アートロードプロジェクト実行委員会(2015)『天童アートロードプロジェクトによる道草のガイドブック 道草のすすめ』

樋口健介(2016)『美術の機能についての一考察ー放課後等デイサービスにおける造形活動の実践及び展覧会への参加を通してー』羽陽学園短期大学紀要第10巻 第2号(P252)

城山萌々、石沢恵理(2020)『てんてん展のアートワークショップ ちよつとちがういつもをあそぼう!感染症対策とワークショップ』大学造形美術教育研究vol.19 実践報告。